



# 暁鐘の音

NO. 19

(かねのね)

秋田大学教職大学院 2021.1.28

## ある酒造会社の経営戦略

教職実践専攻 (教職大学院)

教授 奥 瑞生

寒さ厳しく熱爛の恋しい季節、ある酒造会社の社長さんが語る「さけづくり」についてのお話です。

日本酒は、特定名称酒と普通酒に分けられます。特定名称酒は吟醸酒と純米酒、本醸造酒に分けられ、60%以下の精米(削り)のお酒は純米酒か純米吟醸酒等、50%以下の精米のお酒は純米大吟醸酒と呼ばれます。これら特定名称酒は、市場に出回る日本酒の30%を占め、残り70%は普通酒と呼ばれるお酒です。普通酒とは、1トンの醪(もろみ)に対し、100kgの醸造用アルコールを混ぜた日本酒のことです。日本酒の消費ピークは昭和48年で、現在はその時の1/3程度に減少しています。さて、教職大学院ができて約5年。更なる発展へのヒントは次に隠されているかもしれません。

「私の蔵が目指しているのは、東京ディズニーランドです。東京ディズニーの入場者数は、1億人を突破するまで8年45日、2億人までが6年58日、3億人までが5年107日、4億人までが3年359日と、かかった年数がどんどん短く

なっています。これは何を表すのか・・・ディズニーシーを作ったり新しいアトラクションを考えたり、ホテル、交通等の環境を整えたり、東京ディズニーは常に前へ前へと進んでいるのです。これは、『完成することのない目標』に向けどこまでも進んでいく、『永遠に未完成』が目標なんだと思います。私もこの心構えが何より大事だと思うんです。お客さんから『おいしい酒だ』と評価をいただき、それに甘んじていると、そこから衰退は始まります。例えば、『おいしい』と言われる味を1～2年同じにしていると、お客さんから『なんかおいしくなくなったね』と言われる。『工夫して少しでもおいしいものを造っていくこと』が大切です。伝統の味、老舗と言われるお店も実は、時代とともに消費者の味覚や舌に合うよう研究を重ね、味も微妙に変化しているはず。ですから私も東京ディズニーを目指し、次のことを念頭に努力していく所存です。～常に進化する気持ちを忘れまい。永遠に未完成、この仕事に終着点はないのです。～

## 「いきつけのラーメン屋のおじさんに学ぶ」

教職実践専攻 (教職大学院)

准教授 三浦 亨

私の家のすぐ近くに1件のラーメン屋があります。自宅の一部を改装したお店で、カウンター席が6～7席あるだけの小さな店構えです。おじ

さんと奥さんの2人で切り盛りしていて、一度にたくさん作ることはできません。1人分の麺を鍋で茹で、1杯ずつ作ります。ちょっと混んでいる

と自分のラーメンが出てくるまで時間はかかりませんが、仕事ぶりはとても丁寧で、見ていて飽きません。

いくらか顔なじみになった頃、私はおじさんに訪ねました。

「もうちょっと大きい鍋で、3～4人分を一気に作ったらいんじゃない？」

するとおじさんは、次のように答えてくれました。

「1人でやっているから、この方がいいんです。目の前のお客さんに1杯ずつ作る、それが私の身の丈に合っている気がしてね。エヘヘ。」

一度にたくさん茹でた方が客の回転も速いし、収入も増えるでしょう。でも、目の前のお客さんのため1杯ずつ作ることを大切にしたい、私はその気持ちに感動しました。

ある時、私はまたおじさんに尋ねました。

「今日も変わらずおいしいね。醤油ダレと煮干しスープのバランスが絶妙だよ！」

するとおじさんは、次のように答えてくれました。

「うちの煮干しは飛び魚（アゴ）を使ってるん

だ。いろいろ試して、ようやくこれに落ち着いたね。スープを毎日同じく作るのは難しいんだ。納得いかない時は、思い切って店を開けないこともあるよ。まだまだ勉強だね。エヘヘ。」

その日の気温や湿度、煮干しの量や固さ、そういったちょっとした具合でラーメンのスープは微妙に味を変えるのだそうです。同じように作ったつもりでも100%同じスープにはならない、おじさんはそう言います。納得いかない時は思い切って店を開けない、その代わりに私はまた感動してしまいました。

目の前の一人を大事にする。

納得いくまでスープづくりにこだわる。

いろいろ試して自分の味を見つける。

ラーメンと教育を並べて語るのはとても乱暴ですが、おじさんの話には、教育にもつながる「何かを作り上げる者の気構え」が含まれていると思うのです。

私は、これからもおじさんのラーメンを食べに通うと思います。飾らない人柄のおじさんから、またちょっといい話を聞こうと思っています。

### これからの教育界の未来についての考察

#### 一「ふるさと秋田のキャリア教育」の講義内容を基にして一

学校マネジメントコース

現職院生1年次 伊藤 充敏

今年度は、私にとって教職30年目となる節目の年度である。この30年という月日を費やし、失敗から学んだ事や先輩から教えていただいたこと等、数多くの経験が積み重なって今の自分が創られていることはいわずもがなであり、数多くの経験は私の「宝」となっている。しかしながら、見方を変えると、その経験は少なからず「足かせ」となっている側面もあるのではないかととも思う・・・何か

新しいことを生み出す時は、必ずその経験してきたものを基にしながら考えることになり、「あの時はこうだった」「あの時、こうしたから成功した」「あの時のやり方が一番いい」等、常に「あの時」のことを思い出すために、頭の中にある数多くの引き出しを開けたり閉めたり・・・そして、お目当ての「あの時」をついに探し出し、あたかも新しいものを生み出したかのように胸を張る・・・ただ、

「あの時」を模倣しているだけなのに・・・

ついに、県内初の小中高一貫校である「さきほこれ学園」が開校します。「さきほこれ学園」とはどんな学校なのでしょう？「さきほこれ学園」は広大な敷地を有し、近代的な設備も充実しています。また、校舎の周りには学校田もあり、実際に田植えから米作り、そして収穫まで体験することができるカリキュラムが教育活動の柱となっている事も特徴の一つです。ところで、小中高一貫校の最大のメリットとは何でしょう？たくさんのメリットがありますが、やはり小学校から高等学校までの12年間を同じ校舎で学び、異年齢の仲間との交流から数多くの経験を積むことができる事・・・これが最大のメリットです。本校では「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し、これからの社会を作り出していく子どもたちにとって必要となる資質・能力を育むため、教育活動を学校内で閉じずに、学校外の人的・物的資源と積極的に関わっていく活動を充実させていきたいと思えます。

この「さきほこれ学園」とは、「ふるさと秋田のキャリア教育」の講義の中で、学生と一緒に考えた架空の学園である。4月からの教職大学院での学びを振り返ると、この「小中高一貫校を提案する」という課題だけでなく、様々な講義中の課題に対して、学生と一緒に考えたり話し合ったりするという活動は、「あの時」という足かせで身動きが取れない私から、「足かせ」を外してくれるものであった。言い換えるならば、過去の経験だけが判断基準であった私にとって、新しい見方・考え方を得ることにつながった学生との学びは、とても貴重な時間であったということだ。そして、また一つ宝物が増えたことに、大きな喜びを感じている。

今、若手教員の大量採用に伴う教員育成が課題とされているが、教職大学院で学ぶ学生の姿を見る限り、これからの教育界の未来は間違いなく「明るい！」と声を大にして言える。

### 秋田工業高校を訪問して

#### 学校マネジメントコース

現職院生1年次 小玉 幸子

12月15日(火)、現職院生とストマス1年生が、秋田工業高等学校を訪問しました。

昨年、完成式典が行われた真新しい校舎や人工芝のラグビー場、県内の学校では最大のアリーナ、改築によりリニューアルした実習棟・・・非常に充実した環境に驚きました。そのような近代的な設備の中にある秋田工業高校は、明治37年の創立から116年目を迎える、伝統ある専門高校です。「質実剛健」の校訓のもと、ものづくり、部活動、資格取得、英語の力を教育の4つの柱にしているとのことでした。

機械科、電気エネルギー科、土木科、建築科、工業化学科の実習や3年生の課題研究の様子を参観させていただきました。実習は1グループが8人

以内程度で行われており、ローテーションで1年を通して履修するとのことでした。少人数で、担当の先生と対話しながらじっくり取り組み、先生に促されて学習の内容を私たちに説明してくれる場面もありました。「アセトール化」「OPTN」「キレート滴定法」「整流回路」など、板書には馴染みのない用語が並んでおり、私にとってはとても難解で、感心するばかりでした。課題研究では、多機能型のゴミ箱や牛乳パックをワンタッチで開く装置を開発したり、溶かしたアルミニウムを型に流し込む鑄造に取り組んだり、様々な探究の姿に触れました。1月に校内で発表会があるとのこと、グループで力を合わせて取り組んでいる様子が伝わってきました。

今回の訪問で、明るく礼儀正しい生徒たちが、「ものづくり」を通して、専門的な技術や取り組みの態度を身に付け、主体的に学んでいることがわかりました。かつて、勤務校の作業学習でスロ

ーガンに掲げていた「ものづくりは、心づくり」という言葉を思い出しながら、帰途につきました。寒波で冷え込みの厳しい日でしたが、新しい時代を担う秋工生の姿に「胸熱」の1日となりました。

### 東成瀬村での研修を終えて

学校マネジメントコース  
現職院生1年次 鈴木達哉

12月22日の秋田魁新報に、「東成瀬 積雪2メートル越え」という記事があった。10月に訪れた際は自然の美しさが心に残ったが、冬の厳しい環境も東成瀬村の現実である。そこで生きる子供のために教育に力を入れることは自治体として自然な流れだったのかもしれないと思いながら、課題実地研修を想起した。

当日の講話から、東成瀬村が特色ある教育ができる要因として次の3点に注目した。1つめは、地域の強みと弱みを基に長期的なビジョンとミッションを明確にしていることである。「将来、村に残る子供は40%。村内にいても村外にいても自分の夢をかなえるための基礎を築く。」というビジョン、「少人数のメリットを最大限に生かす。」というミッションが、様々な施策の具現化につながっている。2つめは、予算面でのバックアップである。図書費、塾運営、ALTの配置、一人1台のタブレットなど、必要だと思ったところに思い切って予算を配分している。保護者の経済負担軽減も

手厚い。「村づくりは人づくり」という信念の現れだろう。3つめの要因は、鶴飼教育長である。どんな質問にも的確に答え、子供たちの未来について熱く語る姿に、強力なリーダーシップを感じた。その教育熱は教師にも向けられており、「人を育てる使命感、責任感をもってほしい。」「指導力を高めたい。」という厳しくも温かい言葉に感銘を受けた。教育に対する情熱をもち、目指す方向に突き進むリーダーの存在が東成瀬村の教育を支えていることは間違いない。

さて、地域の強みと弱みを捉えるには「SWOT分析」が、ビジョンとミッションを明確にするには「戦略マップ」がある。そう考えると、教職大学院での学びが学校現場とつながっているのだと改めて感じる。現地に行って直に話を聞くことができたのは貴重な学びの場だったのだ。様々な規制がある中で研修の場を設けてくださった東成瀬村の皆さん、教職大学院の先生方に改めて感謝したい。

### 相模原市の事例紹介講話を聞いて

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生2年次 本田 和也

今年度から全国の小学校でプログラミング教育が全面実施となりました。皆さんはプログラミング教育をどのように捉えているのでしょうか。「何をすれば良いかわからない。」「プログラムを教える

のは難しい。」と言った声が聞こえる気がします。私たち教職大学院の院生も同様の不安を感じています。今回はそういった不安を解消し、今後の秋田県のプログラミング教育を発展させていくこと

を狙いに、全国でも先進的にプログラミング教育を行っている相模原市教育センター指導主事の渡邊茂一さんに講話をしていただきました。

私自身、学部時代からプログラミング教育について研究をしています。プログラミング教育についての理解が浅い人は、「プログラミングを教えればよい。」と勘違いをしがちです。実はそうではありません。既に始まりつつある Society 5.0(超スマート社会)でも子ども達が生きていける力を育むことを目的としています。具体的には、身近にある物の多くに、パソコンやプログラムが使われていることを知り、その仕組みや良さを知ろうとすることが大切になります。相模原市では目的を達成するために、日頃から多くの教師が工夫や実践を重ねています。その成果は近年着々と現れています。

相模原市では 2017 年度から、全ての小学校でプログラミング教育を導入した授業を実施してい

ます。今では、児童らの問題を解決するための手段の一つに「プログラミング」が挙がるほどです。これは文部科学省が示しているプログラミング教育の3つの狙いの内の1つ、「プログラムの仕組み等の理解と問題解決へ活用する態度を育む」を見事に達成しています。

達成している要因はやはり「まずはやってみる。」にあります。この言葉は、今回講話をしていただいた渡邊さんだけではなく、我らがスーパーティーチャー廣嶋徹先生も言っています。とても重みのある素晴らしい格言ですね。

皆さんのプログラミング教育に対する抵抗感はわかります。ただ、一歩でいいのでまずはプログラミング教育に触れてみませんか。秋田を担う子ども達の明るい未来につながることを信じて。私自身もその想いを胸に、プログラミング教育をさらに研究していきたいと思います。

## 1月6日実践研究概要発表会について

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生1年次 小野 彰斗

2021年1月6日に行われた実践研究概要発表会は、2月19、20日の教師力高度化フォーラム、今年卒業する学生にとっては実践研究報告書の完成に向けて、最終調整を行う機会となる。年末年始に帰省した学生もいるため、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から今回は ZOOM で4グループに分けられ行われた。私は自宅から参加したが、途中でこたつの電源が入らなくなり寒い思いをする以外はトラブルは起きなかった。各自が10分発表、10分質疑応答という形で会は進められた。研究のよし悪しは最後の磨きこみで決まる。これまでの研究をポスターやパワーポイント、ワード文書等にまとめ、再度目的と成果等の整合性や内容の確認をした。研究の質を高めるための、質問や助言等も行われた。

私が参加したのは、学部卒の院生の1年生4人、2年生2人のグループだ。一人一人が、新しい視点で、教育の新たな可能性を探っている素晴らしい研究ばかりだったと感じている。批評的読みの力を育むための NIE 教材の開発、オノマトペに着目した音楽と国語の関連学習の可能性を探ったもの、新学力観に基づく見方、考え方を取り入れた授業の提案、下位教材や観点の提示による批判的読みの指導方法の解明を目指したもの等々、多岐にわたる研究の報告がなされた。それぞれの発表に対し、精力的に質問する姿が見られ、それぞれの研究において充実した時間になっていたように思う。

先生方からのご助言の中で最も印象に残ったのは、オリジナリティを明示するべきだという話で

ある。今回、発表の後半、あるいは、質問に答えるうちにその研究のオリジナリティが見えたものがあった。自分の研究がこれまでの研究とどう違うのかを今一度はっきりさせてその部分を全面に出

したプレゼン、報告をしていきたいと感じた。

今回の発表を踏まえ、内容を再吟味し自分たちの研究を相手にしっかりと伝えられるように準備をしていきたい。

### 研修旅行 2 日目について

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生 1 年次 清水 里沙

今回の活動を地域資源の観点で振り返ると、秋田県には気付いていない貴重な資源が多くあることを知ることができたように思う。2 日目のフィールドワークでは、文化財、断層、湧水群といったさまざまな分野の資源について見学を行い、広い視野で秋田県を見つめ直すことができたように感じる。今回行ったのは、払田柵、埋蔵文化財センター、千屋断層、千屋断層学習館、六郷湧水群である。この中で特に印象に残ったものを 2 つ挙げる。

1 つ目は、国指定史跡にもなっている払田柵である。払田柵は平安時代に、国家がこの地の統一を進めるために造った、役所と軍事、儀式的役割を持ったと言われている遺跡だ。しかし、古文書などには、記載が見られず歴史上の名称が未だ解明されていないなど多くの謎を秘めた遺跡でもある。実際にその地に行き、そこから見える景色から、さまざまな想像や推論を展開する活動は非常に興味深かった。この活動から、実際に現地に行く際にも、子どもが頭を働かせられるような体験

を考えていくべきだと感じた。

2 つ目は、埋蔵文化財センターである。埋蔵文化財センターは文化財保護を基本理念とし、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えるために、埋蔵文化財の発掘調査や、遺物などを活用した、教育・普及活動を行っている。今回は、施設の方の解説を聞きながら施設内を見学し、埋蔵文化財の価値や、意義について考えを巡らせた。施設の方とコミュニケーションをとることで学びに広がりや深まりが出たと感じている。地域の資源を考えたときに、人も大きな資源として考えられるのだと学ぶことができた。

今回の活動をきっかけに、現場に出るまでなるべく秋田県を多面的多角的に見て（訪れて）、魅力に気付くことを積極的に行っていきたいと考えている。全体を通して今回の活動の印象としては「温故知新」という言葉が当てはまるものであったと感じた。

### フィールドワークについて

カリキュラム・授業開発コース  
学部卒院生 1 年次 庄司 航

ふるさと秋田の教育資源の授業において、秋田における教育資源として扱える地域素材をプレゼンテーションするためにフィールドワークを行った。今回、私が訪れた調査先は仙北市に位置する

田沢湖であった。田沢湖は、日本で最も深い湖として知られ、一級河川の雄物川水系に属する淡水湖である。この田沢湖には、かつて田沢湖町の特産物として藩主である佐竹氏に献上されたことも

あるクニマスという魚がいた。しかし、戦時中の国策を推進する中で雄物川水系の1つである玉川を引き入れる計画により田沢湖が酸性化し、クニマスが田沢湖から絶滅したという歴史がある。そこから時が経ち、2010年に京都大学のチームが山梨県の西湖を調査した際に、同行した魚類学者の宮澤正之氏(さかなクン)がクニマスを再発見したことで生存が確認され話題となった。この後、再発見されたクニマスは秋田県に貸与され「里帰り」、2017年にはクニマス未来館もオープンし、クニマスの展示や紹介が行われている。仙北市の学校などでは、クニマスについて学ぶ取り組みは多いと思う。その中でも今回考えた教育資源としての使

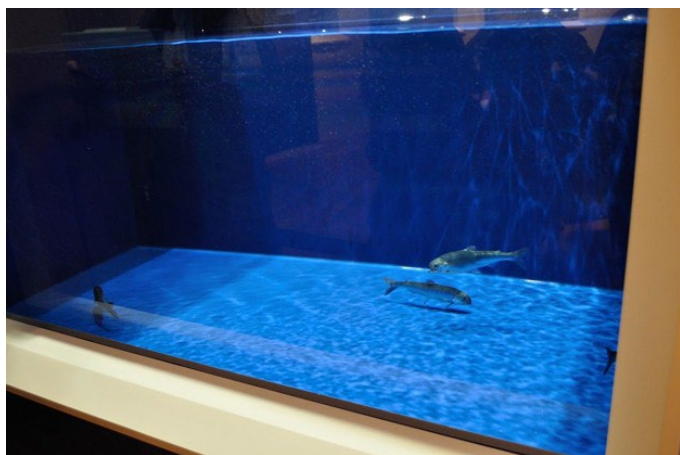
いは、教科横断型の授業である。田沢湖の水質を戻すための方法を考えるために理科学的な内容と社会的な内容を組み合わせた授業が可能であると考えた。この授業では、クニマス未来館や実際に現在田沢湖の水質改善に貢献している玉川ダムなどの諸施設も利用し、クニマスがいなくなってしまった経緯などを追いながら現在の田沢湖にクニマスを戻すためにはどうしたらよいかということを考えることができると思う。今回、フィールドワークで田沢湖を訪れ、諸施設の見学をして改めて教育資源としての価値を再認識できた。これからも地域の資源などを自分の目で実際に見るといった活動を大切にしていきたいと思った。



田沢湖



クニマス未来館の様子



クニマス



玉川ダム

## 今後の行事予定一覧

2021年	1月	6日(水)	実践研究概要発表会
	2月	4日(木)	事前発表会
	2月	8日(月)	「実践研究報告書」の提出締切
	2月	19日(金)・20日(土)	教師力高度化フォーラム
	3月	15日(月)	「実践研究報告書」の最終提出締切

